

躰及見聞候者、早々御奉行迄申上候様、毎年夏中相改爲致誓紙可被置事。
右條々被仰出之趣被得其意、裁許之所々急度可被申觸者也。

寛文二年七月十日

郡 裁 許 中

四 松山・御林竹木之儀御定

石川・河北兩郡松山并御林之竹木縮之儀、被仰出候條、折々山を廻り、無油斷様に可申付事。

一、松山御林之竹木、手寄之在々預置、縮之儀は十村頭へ申付、山茂り候はゞ、様子見計、下刈之枝葉百姓にとらせ可申事。

一、松・杉・桐・楓・唐竹・檜、御用之外爲伐申間敷候。但、百姓持高之内に有之分は、最前被仰出候通被下候間、自然御用に伐取候はゞ、其時々御奉行代人銀請取相渡候様可仕候。大木・大唐竹之儀は、聞届伐取候様可申付事。

一、栗之木者、百姓支配に被仰付候間、随分茂らせ、百姓

たそくに可仕事。

一、御用に伐取候竹木之分、不依多少、時々御奉行入切手に御用所御印有之を以、可相渡事。

一、雪折・立枯松末木枝葉之分者、土瓦燒薪に、御奉行切手算用場御印を以可相渡事。

一、百姓火事に逢候敷、又は家破損修理等仕に付而、被下材木之儀、途吟味十村番付を取、御算用場御印を以可相渡事。

一、御用に伐候竹木、向後所々百姓違不申、末木枝葉取集、村肝煎へ預置、切手を取、拂方算用場以相談、猥に無之様可申付事。

一、毎年正月御城中飾松竹、同御家中へ被下松、別紙帳面に記遊候間、可得其意事。

一、むざと松木取あつかひ候もの有之候はゞ、可途吟味事。

一、松木・御林之竹木盜候者、何ものによらずとらへ籠合、又は裁許人へ可相斷。見届候者に者褒美を可被下事。

附り、百姓分盜候はゞ、其身追出、其村一作免一步上可申事。

一、雪折・風折・立枯、念を入可相改事。
附り、雪前無滞竹まかせ可申事。

一、所々明地を見圖、木之實をまかせ可申事。
右被仰出候通相違有間敷者也。

寛文六年九月廿八日

奥村 因幡

奥村 河内

前田 對馬

今 枝 民部

(一) 國田左七郎殿、八郎左衛門殿、河北國左衛門殿、水上喜八郎殿
石川・河北郡山奉行

五 諸百姓衣食住之儀御定

定

一、此以前より如申付、在々諸百姓奢たる儀不仕、農業を專にいたし、進退持たつるやうに常々心懸、諸事無油斷はげまし可申事。

一、家作者、自今以後二間梁、ひさは六尺に過へからず。但、高多持候百姓、土の間廣く仕候儀者不苦、并往還筋人宿仕ものは各別之事。

一、なげし作・杉戸附書院・くしがた彫物・組物一切無用、床ぶち・さん・かまち等塗候儀、并から紙はり付堅令停止事。

一、衣類之儀、跡々定置通、木綿・布之外着用仕間敷候。但、十村并扶持人之儀者、男女共袖令免許事。

一、向後百姓之衣類、男女共に紫・紅に不可染。此外之諸色、かたなしに染可着用事。

一、百姓食物、常々雜穀を可用、米糶に不可食事。

一、十村并扶持人・惣百姓男女共に、乗物一切停止之事。

一、神事或葬禮・年忌之法事、或婚禮・諸事之祝儀等に至迄、百姓に不似合不可致結構事。

附り、相撲・あやつり人形つかひ、其外見物之類、圓停止之。勿論一夜に而茂宿かし申間敷事。

一、常々申付置候改作之定、急度可相守之事。
附り、脇指一切停止之事。

右條々堅相守候様、十村并扶持人・肝煎、常々改之可申付。若令違背もの有之者、十村・扶持人・村肝煎より、郡奉行・改作奉行へ急度可申達。自然かくし置、脇より令露顯者、十村并扶持人・村肝煎迄可爲曲事者也。